



片岡 泰（札幌国際芸術祭実行委員会 事務局長）

民間企業を経て、1995年札幌市役所に入庁。障がい福祉、人事、病院、教育、産業振興などの部署での勤務を経て、2021年4月から現職。

トーク内容

- 札幌国際芸術祭を司る「事業課」と「総務課」、最大14人ほどの市役所職員
- 行政の中ではほとんどない「3年に1回」というイベントの難しさ
- 専門知識が必要な中で、市役所職員として得られる貴重な経験
- 札幌市長とともにオーストリア・リンツで見た、クリエイティブな生態系
- 札幌市が行政として、アートを通じて新しい価値を見出していくために



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/KojuYwbJgYk>



Q 札幌国際芸術祭で、市役所の人はどんな仕事をしているのでしょうか？

芸術祭の開催年には最大14人ほどの市役所職員と、そして同数ほどの外部スタッフの方が関わっています。その中で市役所職員の所属は大きく「総務課」と「事業課」に分かれていて、総務課は予算の調整や部署の庶務といった仕事、事業課は芸術祭の具体的な制作に関わる仕事をしています。

市役所職員はおよそ3～6年ほどのスパンで異動になります。そのため、芸術祭事務局に来た職員は、基本的にはアートの基礎知識がない状態からスタートします。そういった状況の中で芸術祭に関わっていくということは、たくさんのハードルを経験することになり本当に大変ですが、外部スタッフのみなさんとともに作り上げていきます。世界的に活躍するアーティストやスタッフとの協働で、見慣れた市内に国際的で大規模な展覧会をつくり上げるというのは、めったにない経験ですよ。

Q 札幌国際芸術祭は、今後どのような発展があると思いますか？

これまでの札幌国際芸術祭の延長線上に、アートを通じて社会にいい刺激を与える機会を生み出すことを考えていけたらいいのかなと思っています。

札幌国際芸術祭は2012年に札幌市が定めた「札幌国際芸術祭（仮称）基本構想」をベースに実施されていますが、芸術祭を継続する前に構想されたにもかかわらず、とても先読みされた内容だなと思っています。いわゆる「アートのフェスティバル」だけじゃないことを網羅していて、初回からの10年間でさまざまなことが変化する中でも、基本構想からは逸脱していない。まずそこがすごいことだなと思います。

個人的には、2024年9月にSIAF2024ディレクターの小川秀明さんの拠点であるオーストリア・リンツ市に秋元札幌市長と一緒に訪問した際に、アートを起点にしたスタートアップのハブとなる施設「tabakfabrik（タバコファブリック）」が、完全に生態系として成立していたのが印象的でした。200を超えるスタートアップが巨大な工場跡に入居していて、都市の若さやエネルギーになっている。こういう先駆的でクリエイティブな社会実装があるんだ、というのを目の当たりにしました。

もちろんただ真似すればいいというものでもないですし、僕の中でも完全に咀嚼できていないわけではありません。ですがアートと社会がどう接合していくか、アートを通じてどうやってまちづくりに革新的な刺激を与えていくか、いろいろな形を参考にしながら、札幌ならではのあり方を、これからもみんなで議論していけたら面白いかなと思っています。
